



TITLE:

第49回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

第49回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1968, 37(5): 749-751

ISSUE DATE:

1968-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/207476>

RIGHT:

第 49 回 岐 阜 外 科 集 談 会

日時：昭和43年5月22日 午後5時30分より

場所：岐阜大学医学部丹羽講堂

1. 脳スキャンとその 2, 3 の手術所見との比較

岐 大 放

今枝孟義・仙田宏平

1953年 Brownell & Sweet によつて初めて Brain tumor の診断に R. I. スキャンニングが用いられて以来、その発達はめざましく、私どものところでも、昨年の夏頃より、東芝製スキャナにより Brain scanning をはじめ現在まで数10例をかぞえるまでになつている。検査に用いている R. I. は最も被爆線量の少ない ^{113m}In を使い、静注前60分して検査を開始し、正面及び左右いづれかの側面の2方向よりのスキャンを行ない患者1人につき1時間ちよつとの検査時間を要している。腫瘍の検出能であるが直径2～3cm以上なら検出可能である。次に腫瘍の組織学的性質と診断率との間には、明かに相関がみられ、未分化なもの—meningioma, 悪性 astrocytoma glioblastoma, metastatic tumor は診断率がよく、よく分化した良性 astrocytoma, acoustic Neuroma の診断率は悪い。Wang らの成績によるとスキャンの診断的中率は89%であり、脳血管、気脳造影、脳波、頭部単純撮影のいずれの単独診断率よりもよく、スキャン、脳波頭単純の3者併用した場合には診断率95%であつたとのべている。

2. 火傷瘢痕、瘻孔より発生した皮膚癌の症例

岐大病院第一外科

山口 茂・吉田敏生

① 虫垂炎性腹膜炎から腸瘻、潰瘍を形成し、43年経過して発生した扁平上皮癌。

② 下腿外傷から骨髓炎を併発し難治性潰瘍を形成し18年経過して発生した扁平上皮癌。

③ 下腿骨髓炎から潰瘍を形成し55年経過して発生した扁平上皮癌。

④ 痔核手術後痔瘻を形成し1年経過し発生した粘液腺癌（只この症例は痔核手術前から痔瘻が存在していた模様である）

⑤ 会陰部外傷から直腸瘻を形成し30年経過して発生した扁平上皮癌。

⑥ 右膝関節部の外傷から瘻孔を形成し35年経過して発生した扁平上皮癌。

⑦ 火傷瘢痕に潰瘍、腫瘍を形成し、瘢痕形成後50年経過して発生した扁平上皮癌。

3. 当院における新生児、乳児外科疾患の臨床的観察

岐阜市民病院外科

島田 脩・河村義博

安江幸洋

最近4年2ヵ月間の当院外科の満6才以下の小児外科疾患は275例でその中満1才以下の症例は80例で6例は手術を行なつていない。又鼠経ヘルニアは44例で大半を占め、次で消化管の奇型が9例である。即ち腸回転異常、腸閉鎖症、鎖肛各2例、食道閉鎖、臍腸瘻、重複腸管各1例である。先天性幽門狭窄症は5例で全てラムステッド法により全治した。腫瘍は3例であるが悪性腫瘍は1例もない。その他胎内囊破裂の臍帯ヘルニア、横隔膜ヘルニア各1例等がある。

生後1ヵ月以内に手術を行なつた症例は11例で、大部分は緊急手術を行ない、又仙尾部奇型腫を除き消化管に何等か関係がある。死亡例は5例で全てこの生後1ヵ月以内の手術例である。即ち腸閉鎖症2例、食道閉鎖、鎖肛、腸回転異常の各1例である。

4. 経心室性交連裂開術の術後成績について

日野荘外科

加藤康夫・小林君美

井上律子・清水慶彦

松本守海

日野荘では、昭和35年以来30例の僧帽弁狭窄症の手術を行なつて来たが、その内訳は経心房性用指裂開術11例、経心房性交連切開術（櫛原式 切開刀 使用）4例、経心室性交連裂開術（クーリー 拡大器 使用）11例、体外循環下開心術4例である。

その術後成績からみると、非開心術では、裂開度の点において優れている経心室性交連裂開術は全例において著明改善がみとめられ、他の二方法に対して大きな差がある（経心房性交連切開術、用指裂開術の著明改善率はそれぞれ75%、29%である）。

手術時左心室切開部の巾着縫合を完全にすれば大量出血を来すこともなく、術後心筋に与える影響も差して問題とならない。

左房内凝血が疑われる症例には開心術を行なうべきだが、体外循環が簡易かつ安全に行ない得るようになった今日でも、経心室性交連裂開術は、その裂開度、術後成績の優秀さ、手術侵襲の点で十分利用すべき手術である。

5. 所謂右肺動脈欠損を伴った動脈管開存症の一手術例

岐大第1外科

渡辺 裕・広瀬光男
安藤充晴

先天性肺動脈欠損症は稀な疾患で、特に本邦においては、2、3の報告例を見るに過ぎない。われわれは最近本症を伴った動脈管開存症を手術する機会を得、先天性右肺動脈欠損症であることを確認したので報告する。

症例は11才男で、主訴は運動後の易疲労性。2年前学校検診にて心雑音を指摘された。生来風邪をひき易く、最近運動後の疲労を訴える。咳嗽・喀痰なく、けいれん・失神・チアノーゼなどを来したこともない。左前胸部は著明に膨隆し、第2肋間胸骨左縁に最強点を有する収縮期雑音を聴取し、呼吸音は右側はわずかに弱い。

ACGにて肺動脈幹より右肺への流出を認めず、右心カテーテルにて右室・肺動脈圧が高く、肺動脈幹・左肺動脈の酸素飽和度が上昇している。肺スキャンにて右肺は記録されない。

GOF 麻酔軽度低体温下に左開胸を行ない、右肺動脈は全く認められず、動脈管切離術のみ行ない手術を終了した。術後経過良好で4週後退院した。

6. 成人亜急性骨髓炎の2症例

中條 武・大熊晨夫
三沢恵一

症例Ⅰは57才の男子で、1ヵ月前より誘因なく左側

頸部から左鎖骨にかけて鈍痛があつた。レ線像で左鎖骨胸骨縁は不鮮明であるが骨膜肥厚、骨破壊及び spicula 像はなかつた。手術施行、採取標本検査にて亜急性骨髓炎と判明した。症例Ⅱは56才男子で3ヵ月前より右上腕の鈍痛と腫脹を来した。レ線像にて Periosteal ossification 及び aufhellung を認め骨腫瘍をうたがわれた。手術施行、組織像は慢性の骨髓炎であつた。成人骨髓炎の発症率、好発骨、罹患骨内に於ける発症部位について述べ、成人骨髓炎と鑑別を要する疾患をあげ、初発症状、レ線像、補助診断法についてけんとうし、診断上必要なことは成人骨髓炎が決して稀なものでないことを認識することにあることを強調した。

7. 肝スキャンにより診断が確かめられた2症例

岐大 放

今枝孟義・仙田宏平

臓器スキャンは、患者に苦痛を与えることなく、目的臓器の位置、形態、大きさを描出し、Space occupying lesion を検出し、更には機能状態を知る大きな手掛りとなります。使用される放射性医薬品の人体への影響は非常に少なく、被曝線量からみて、胸部単純X線写真1枚程度です。

肝スキャンを例にとれば、使用される放射性医薬品としては¹⁹⁸Au コロイドと¹³¹I 標識 ローゼンベンガル等がありまして、各々のもつ性質が異なり、金コロイドは肝の Kupffer 量細胞に摂取されるもので肝以外の RES の所属臓器である脾や骨髓にも分布し得ます。一方ローゼンベンガルは肝実質細胞に摂取され、これよりすみやかに排泄され胆道を経て腸管へと排出されます。この様に同一臓器にて角度をかえて、又他の臓器スキャンを駆使することにより、私共は先天性胆道閉鎖症及び神経等細胞腫の2症例の診断の確認をしております。

8. 特発性破綻に因り腹腔内大出血を来した原発性肝癌の2例

大垣市民病院外科

森 直之・蜂須賀喜多男

富安 信・石川覚也・村瀬充也

田本果司・平松隼夫

症例Ⅰ 58才の女性で嘔吐、上腹部痛を主訴として

来院した。腹腔穿刺で純血性の腹水を得た。原因不明の腹腔内大出血とし開腹するに、左葉に肝硬変を伴う肝癌がありその破綻による大出血であつた。左葉部分切除術を施行したが術後2日目、消化管大量出血にて死亡した。組織学的には胞巣状の肝細胞癌であつた。

症例Ⅱ 41才の男性で右季肋下痛を主訴として来院した。腹腔穿刺で純血性の腹水を得た。前例に鑑み肝癌の破綻による出血と診断して開腹した。右葉に肝硬変を伴つた肝癌があり、その破綻による大出血と推定された。試験開腹に終つたが、4ヵ月後小康を保っている。組織学的には定型的な胞巣状の肝細胞癌であつた。

9. イレウス症状を呈した巨大腸間膜嚢腔の一例

岐大第1外科

加藤正夫・神本敏治

20才女子で5, 6年前より腹痛、時に痛痛発作を来とし、腸管癒着障害として治療を受けていたが良くなり、某産婦人科で腰麻の下に手術を受け嚢腫の穿孔のみにて閉腹後イレウス症状を来し再開腹によりTreitz 靱帯より約10cm肛門側より殆んど全小腸が時計の針の同方向に720度軸捻転していた。嚢腫はTreitz 靱帯より約20cmの部位で約10×10×10cm大で多房性で暗赤色となり、腸管は壊死性となつていた。嚢腫剥出及び腸管の一部切除を行なつたが術後3日目に全身衰弱のため死亡した。組織学的には多房性で血管腫と区別が困難であるが、初回の手術所見と所々に蛋白様物質が嚢腫内にみられることからリンパ管腫と考えられる。

10. 腹部腫瘤を主訴とする Crohn 氏病症例

岐阜大学医学部第二外科

坂井 昇・三尾六蔵

虫垂切除、右下腹部腫瘍摘出と臨床病理上、興味

深い既往歴を有し、下腹部腫瘤を主訴とする Crohn 氏病第Ⅳ型を経験したので報告する。

症例. 38才、男子。2年前より左下腹部に自身で下腹部に腫瘤を触れるようになった。開腹するに、回腸末端部より25cm口側手拳大の腫瘤形成が見られた。腫瘤部の粘膜面には非常に深い潰瘍が認められた。

切除標本の病理組織検査ではCrohn 氏病であつた。前回手術の詳細は不明であるか、これもCrohn 氏病であり、今回はこの再発例と考える。再発率に若干の文献的考按を加えた。

なお本症例には skip lesion が認められ。

11. V. Reckbing hausen 氏病に合併した直腸癌の1例

岐大第2外科

三沢恵一・国村洋一

患者47才男子、20才頃より両下肢に鈍痛を来し、両側下腹部に腫瘤を認めていた。昭和35年に頸部に鶏卵大の腫瘤を認め当科にて左腹部の腫瘤と併せて摘出している。両者共組織学的に神経線維腫であつた。腹部の腫瘤は後腹膜腔のもので重さ620 gr、右側腫瘤との連絡はない。昭和42年8月頃より血便を来し本年2月に当科に入院した。家族歴で兄弟8人中4人にRH病を思ふす腫瘤を認めている。

現症：前胸部に黒褐色小色素斑を多数認む。注腸透視にて直腸右壁に大きな陰影欠損を認む。手術は単孔式人工肛門造設術を行なつた。組織学的には直腸の管状腺癌であつた。

両側後腹膜腫瘍を部分症として伴つたRH病患者に直腸癌を合併した1例を報告した。